

伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(7)

喜 念 原 始 墓
喜念クバンシャ遺跡
喜念クバンシャ岩陰墓

—宅地造成に伴う喜念原始墓の確認調査—

1988. 3

鹿児島県大島郡伊仙町教育委員会



1. 喜念クバンシャ岩陰墓・喜念クバンシャ遺跡遠景（北側より）



2. 2号墓人骨出土状況



1号基調査風景



2号基調査風景



1号墓と周辺地形



1号墓及び2号墓の位置



喜念原始墓推定地



2号墓完掘状況



喜念クバンシャ遺跡調査風景



喜念クバンシャ遺跡調査風景

序 文

本町は埋蔵文化財が豊富に存在し、その中のいくつかはすでに発掘調査がなされ、町の文化財として保護されています。喜念原始墓においても、早急に専門的に調査研究を進める必要を考へて、昭和62年度国宝重要文化財等保存整備事業として国県の助成を得て発掘調査しここに、その概要をまとめました。この調査概要が、これからの関係者の学術研究の資料として、活用されることを念願します。

この調査に当たって、文化庁、県文化課並びに土地所有者や直接作業にあたった方々をはじめ、御協力下さった多くの皆さんに謝意を表します。

昭和63年3月

伊仙町教育委員会

教育長 實 島 明 良

例 言

1. 本報告書は、伊仙町教育委員会が、文化庁及び鹿児島県の補助を得て、昭和62年度に実施した宅地造成に伴う喜念原始墓確認調査の報告書である。
2. 調査の組織は、調査の経過の中で記した。
3. 本書で用いたレベル数値は、すべて海拔絶対高である。
4. 本書の執筆及び編集は、立神、長野が行なった。
5. 出土人骨は、小片丘彦・峰和治（鹿児島大学歯学部口腔解剖学教室Ⅱ）の両氏に依頼した。
6. 本書の遺物番号は、通し番号とし、挿図番号・本文中の番号は一致する。
7. 本書に使用した地図は、鹿児島県所有のものと、伊仙町所有のものを使用した。
8. 出土遺物は、本報告刊行後伊仙町教育委員会が保管し、伊仙町立伊仙町歴史民俗資料館に展示・公開する。

目 次

序 文	
例 言	
第1章 調査の経過	5
第1節 調査に至るまでの経過	5
第2節 調査の組織	5
第3節 調査の経過	6
第2章 遺跡の位置及び周辺遺跡	9
第1節 遺跡の位置	9
第2節 周辺遺跡	9
第3章 調査の概要	16
第1節 遺跡の概要	16
第2節 喜念クバンシャ1号墓の概要	24
第3節 喜念クバンシャ2号墓の概要	28
第4節 喜念クバンシャ3号墓の概要	31
第5節 喜念クバンシャ遺跡の概要	32
第4章 まとめにかえて	38
一付編一	
鹿児島県伊仙町(徳之島)喜念クバンシャ岩陰墓出土人骨	50

挿 図 目 次

第1図 喜念原始墓及び喜念クバンシャ遺跡と周辺遺跡	10
第2図 喜念クバンシャ岩陰墓・喜念クバンシャ遺跡及び周辺遺跡	17
第3図 喜念クバンシャ岩陰墓・喜念クバンシャ遺跡の位置及び地形図	18
第4図 喜念クバンシャ岩陰墓1号墓位置図	20
第5図 喜念クバンシャ岩陰墓1号墓人骨出土状況実測図	21
第6図 喜念クバンシャ岩陰墓1号墓実測図	22
第7図 喜念クバンシャ岩陰墓1号墓出土骨製品実測図	24
第8図 喜念クバンシャ岩陰墓2号墓位置図	25
第9図 喜念クバンシャ岩陰墓2号墓人骨出土状況実測図	26
第10図 喜念クバンシャ岩陰墓2号墓実測図	27
第11図 喜念クバンシャ岩陰墓2号墓出土具製品実測図	28
第12図 喜念クバンシャ岩陰墓3号墓位置図	29
第13図 喜念クバンシャ岩陰墓3号墓実測図	30

第14図	喜念クバンシャ岩陰墓3号墓出土貝製品実測図	31
第15図	喜念クバンシャ岩陰墓3号墓遺物及び周辺遺物実測図	32
第16図	喜念クバンシャ遺跡トレンチ位置図	33
第17図	喜念クバンシャ遺跡土層断面実測図	34
第18図	喜念クバンシャ遺跡出土遺物実測図	35
第19図	喜念クバンシャ遺跡出土遺物実測図	36
第20図	喜念クバンシャ遺跡出土貝製品及び石器実測図	37

図 版 目 次

図版1	喜念原始墓発掘風景	8
図版2	遺跡遠景(北側より)	39
	遺跡遠景(南側より)	
図版3	1号墓及び3号墓調査風景	40
	2号墓人骨調査風景	
図版4	1号墓調査風景	41
	1号墓調査風景	
図版5	1号墓人骨出土状況(南西側より)	42
	1号墓人骨出土状況(南東側より)	
図版6	2号墓調査風景	43
	2号墓調査風景(人骨)	
図版7	2号墓人骨出土状況(北側より)	44
	2号墓人骨出土状況	
図版8	2号墓人骨出土状況(西側より)	45
	2号墓完掘状況(北側より)	
図版9	3号墓人骨出土状況(南西側より)	46
	3号墓近景(南西側より)	
図版10	喜念クバンシャ遺跡発掘風景	47
	喜念クバンシャ遺跡土層断面	
図版11	出土遺物 I	48
図版12	出土遺物 II	49

表 目 次

第1表	喜念原始墓と周辺遺跡	15
-----	------------	----

第1章 調査の経過

第1章 調査に至るまでの経過

喜念原始墓は、「大隅國大島郡（徳之島）伊仙町喜念縣道の遺跡は、昭和九年春新縣道工事の爲陸起珊瑚礁切取作業中、人骨に伴ひ貝輪の二、三が発見され當時同村在住の廣瀬祐良氏により採集されたのが最初である。」¹⁾と発見の経過が報告され、さらに、「余は昭和10年一月より二月にかけて、同島に於いて古人骨採集及人類學的研究を行なつた際にも、本調査を目的の一とした。——中略——余は昭和10年一月二七日及び三一日の兩日此の遺跡を掘つて、夥しい各種貝製裝飾品と共に十數例の人骨を獲た。」²⁾とあり、昭和10年には、故三宅宗悦氏により調査が実施されている。

その後、個人により本原始墓を含む地域において宅地造成計画がなされ、伊仙町教育委員会では、原始墓が残存している可能性が高いとの判断のもとに、土地所有者及び鹿児島県教育委員会文化課と協議を重ねた。

その結果、個人による宅地造成のため、工事に先立って発掘調査を実施し、埋藏文化財の記録保存と周辺の確認調査を実施することになり、昭和62年度に国及び鹿児島県の補助を得て、伊仙町教育委員会で発掘調査を実施することになった。

調査期間は、昭和62年6月15日より昭和62年7月4日まで現地での調査を終了し、その後の整理作業と報告書の作成は鹿児島県教育委員会文化課に依頼した。

第2節 調査の組織

調査主体者	伊仙町教育委員会	教 育 長	實島 明良
調査責任者	◇	社会教育課長	中村 泰祐
	◇	派遣社会教育主事	永野 幸一
	◇	庶務係長	重田 吉明
	◇	社会教育主事	時元 孝
調査事務	◇	社会教育指導員	常山 秀秋
調査担当者	県教育庁 文化課	主 査	立神 次郎
	◇	◇	長野 真一
遺物指導	鹿児島大学	歯学部 教授	小片 丘彦
(人骨)	◇	歯学部	峯 和治
(動物骨)	◇	農学部 助教授	西中川 駿

なお、調査企画において、鹿児島県教育庁文化課吉井浩一、同課長補佐川畑栄造、主幹森田齊、主任文化財研究員兼埋藏文化財係長立園多賀生、企画助成係長浜松巖、同主査京田秀充の各氏に指導・助言を得た。調査中は伊仙町文化財保護審議会委員長義憲和氏、伊仙町歴史民俗資料館館長義山正市氏、吉田福秀氏、地元の窪田氏の協力・助言を得た。

第3節 調査の経過

発掘調査は、当初に原始墓の所在確認の作業を主眼において実施し、その後、周辺の確認調査へと進めた。期間は、昭和62年6月1日から昭和62年7月4日まで実施し、その後、整理作業は、県文化課埋蔵文化財高富収蔵庫において実施した。発掘調査の経過は、以下日誌抄で略述する。

- 6月15日(月) 徳之島空港着。教育委員会へ、事務連絡。遺跡地(現地)での事前打合せ。
(交通安全及びハブ対策、排土処理)。プレハブ調査事務所設営作業。発掘機材・器具搬入作業。用具点検。
- 6月16日(火) 発掘調査開始。調査方法の検討。作業員に対して調査の主旨と作業上留意すべき事について注意及び説明。調査地が県道の急カーブなために、道路占有許可をとり交通整理を行ないながら伐採作業を実施する。原始墓推定地の珊瑚礁の詰石除去作業。岩陰内には上部まで茶褐色粘質土の堆積を認める。自然堆積が考えられる。堆積土除去作業実施。
- 6月17日(水) 岩陰内の堆積土除去作業。珊瑚礁の亀裂部からの侵入が考えられ、除去作業併行して伐採作業を実施する。当時の原始墓の可能性は薄くなる。一部、県道両サイドの岩陰を中心に周辺調査を実施する。その結果、新たに二ヶ所の岩陰から人骨の破片を確認する。北側より1号墓・2号墓と調査上の名称をつける。1号墓よりオオツタノハ貝、大腿骨の破片、骨製品が出土。2号墓より頭蓋冠や大腿骨の破片を検出する。3号墓を検出し、大腿骨破片や土器破片が出土する。
- 6月18日(木) 雨天のために作業員は作業を休止する。周辺調査を実施するため県道南側空地の客土及び塵の除去作業を町当局が実施するため立会い作業。1・2号墓ともに県道より3～4mほどあり、又、岩陰内のテラス部も狭いために枠足場の準備を実施する。
- 6月19日(金) 1号墓掘り下げ作業。人骨の検出に努める。2号墓掘り下げ作業。人骨の細片を岩陰内全体に認める。鹿児島大学歯学部小片教授・峯の両氏による調査指導(人骨掘り下げ及び実測作業)。周辺部の伐採作業及び掘り下げ作業。3号墓掘り下げ作業。人骨及び土器破片が散乱した状態で検出する。
- 6月20日(土) 1号墓掘り下げ及び実測作業。頭蓋骨の一部やオオツタノハ貝などを検出する。岩陰内の遺構の一部として、海岸より楕円状の珊瑚礁礫を使用した可能性が高い。2号墓掘り下げ作業。人骨出土状況実測・写真撮影・取り上げ作業。人骨は、頭蓋冠、下顎骨、歯、椎骨、肩甲骨、手指骨、大腿骨、脛骨等が検出され、複数体の人骨が考えられる。3号墓掘り下げ作業、精査作業、写真撮影、実測作業、取り上げ作業。人骨は、大腿骨、頸骨、足指骨等を検出する。小片教授・峯両氏の調査指導(人骨の掘り下げ及び実測作業)。

- 6月21日(日) 雨天のため作業員は作業を休止する。1号墓人骨実測作業。人骨は、腐植土内に認め、小児骨を検出する。人骨には、頭蓋骨、椎骨、上腕骨、尺骨、大腿骨、歯骨等の検出を認める。岩陰内の埋葬施設は、外部より扁平な楕円礫を挟み箱式状に組合せ敷いた状態が考えられる。人骨取り上げ作業。
小片教授・峯岡氏の調査指導（人骨の掘り下げ、実測作業、取り上げ作業）。
- 6月22日(月) 1号墓の埋土掘り下げ作業及び絆足場設置作業。2号墓の埋土内掘り下げ作業。さらに、人骨が出土するために精査作業、写真撮影、実測作業を繰り返す。遺跡地周辺について地形平板実測作業。周辺地域について伐採作業を実施し、岩陰部の掘り下げ作業を実施する。
- 6月23日(火) 1・2号墓ともに昨日からの作業を繰り返す。ともに細骨片の出土がある。絆足場補強作業。3号墓の掘り下げ作業。オオツツノハ貝、シャコ貝、土器破片の出土が認められ、土器は、無文で口縁部から胴部付近までの破片である。原始墓(昭和10年調査時)と岩陰部は、ほぼ同レベルの位置が推定される。周辺の地形平板実測作業。周辺地域の伐採作業を繰り返し岩陰部の掘り下げ作業を実施する。
- 6月24日(水) 雨天のために作業員は作業を休止する。1号墓は、人骨出土状況実測、写真撮影、取り上げ作業。岩陰最深部より動物骨の破片を認める。雨が激しくなったために作業中止する。
- 6月25日(木) 1号墓は、人骨取り上げ後掘り下げ作業を実施する。2号墓と同様の葬所が類推できる。周辺の地形平板実測作業。県道(海岸側)荒地において、トレンチによる確認調査を実施する(1地点)。当地域は、旧地形に客土や不燃物の塵等で造成され、その除去を実施した箇所について調査を行なった。
- 6月26日(金) 2号墓について掘り下げ作業。精査作業、写真撮影、平面実測作業。周辺地形平板実測作業。1地点の確認調査。マーヅ層除去後灰黒褐色粘質土(若干砂層を含む)について掘り下げを実測する。この層は、15~20cm大の珊瑚礫を大量に含み、礫と礫の間に灰黒褐色粘質土を認める状況であり、この層よりシャコ貝、夜光貝、土器破片、人骨破片等が混在し、また、摩滅を受けて出土した。
- 6月27日(土) 旅行日。徳之島から鹿児島。
- 6月29日(月) 旅行日。鹿児島から徳之島。
- 6月30日(火) 2号墓について平面及び断面実測作業。1号墓については掘り下げ作業後平面実測作業実施する。1地点の調査確認。遺物は、珊瑚礫間より少量であるが認める(貝殻類や人骨細片)。層は南側及び東側へ傾斜を保ち、層幅は、一定でなく不安定な堆積である。
- 7月1日(水) 1号墓について平面及び断面実測作業。遺跡周辺地形平板実測作業(1/50・

1/100・1/1000)。1地点の確認調査。出土遺物の状況より流れ込みが考えられる。珊瑚礫は扁平で楕円礫が多く、かなりの厚さで堆積している。

- 7月2日(木) 1・2号墓について実測作業後さらに掘り下げ作業実施。3号墓について平面・断面実測作業。1地点の確認調査。土器破片、人骨破片、貝殻、貝製品等の出土を認めた。
- 7月3日(金) 1・2号墓について掘り下げ及び実測作業終了。1地点の確認調査。土層断面実測作業。二ヶ所の枠足場除去作業。発掘機材・器具撤出作業。各関係者へ終了のあいさつ。
- 7月4日(土) 旅行日。徳之島から鹿児島。

整理作業は、県教育庁文化課埋蔵文化財重富収蔵庫において、昭和62年7月6日から昭和63年3月31日まで実施し、報告書のための作業を行なった。

図版 1



喜念原始墓発掘調査風景

第2章 遺跡の位置及び周辺遺跡

第1節 遺跡の調査(第1から3図)

伊仙町の位置する徳之島は、薩摩半島より南へ約500km経てた奄美諸島の一つで、奄美大島と沖永良部の間に位置する。島の面積は248平方kmで、地形は、東北部から西西方向に延び、中央部には標高645mの井之川岳を主峰とする花崗岩の山地が連なる。標高約200m付近を境として、山地と隆起珊瑚礁に大別される。この中央の山地を取巻くように、海岸に向かってゆるやかに傾斜した段丘が広がり島の東南から南部西南にかけて、隆起珊瑚礁が発達して、広大な海岸砂丘を形成している。隆起珊瑚礁より生成が古いので琉球石灰岩と呼ばれ厚いところでは100mを越えている。海岸線は天城町の南部から伊仙町にかけて、島の西岸がほとんど20~100mほどの断崖で海に落ち込んでいるのに対し、島の東岸はほとんど全面にわたる隆起珊瑚礁が発達している。^{1, 6, 7}

遺跡の所在する伊仙町は、奄美大島のほぼ中央に位置する徳之島の南西部に位置し、北東は大島郡徳之島町、北西は同郡天城町に相接している。町の北東部にあたる標高417.4mの犬田布岳からは、南へ延びた山地やその裾野が穏やかに傾斜し、平坦地となり集落や砂糖キビ畑が連なり、砂丘や珊瑚礁が発達した海岸線となっている。⁸

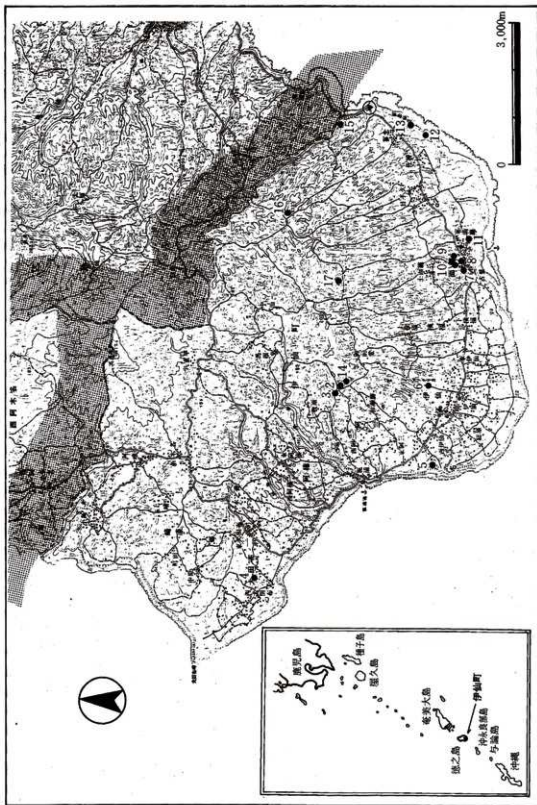
本遺跡は、大島郡伊仙町喜念字ムテナウ844番地に位置し、伊仙町役場より北北東へ約6,000mにある。この付近は、喜念東北部の海岸沿いで、喜念浜と本川浜の境いの海岸の突き出たところを県道80号線伊仙・亀津・徳之島空港線が急カーブで横切っている。その県道北側沿いの隆起珊瑚礁の崖下にあつたと言われ、その経緯は、昭和9年4月に県道工事のために、隆起珊瑚礁開削の際、人骨・貝輪が発見され、当時、伊仙村在住の廣瀬祐良氏により採集されたのが最初である。その後、昭和10年1月27・31日の両日に三宅宗悦氏による調査で、各種の貝製裝飾品・牙製裝飾品・十数例の人骨・土器等が発見され、土器については、現在京都大学考古学教室に保管されている。^{1, 3}

第2節 周辺遺跡(第1図, 表1)

徳之島は、奄美大島について先史遺跡の多い島であり、中でも伊仙町の遺跡は、笠利町につぐ遺跡数で、その大半は、南部の海岸沿いに集中している。しかし、近年では、地元研究者の精力的な努力で内陸部での遺跡の発見も報告されている。特に、古窯跡の発見等は、西南諸島でナゾとされていた類須恵器偏年の解明に意義がある。これまで、本町の遺跡については、今日までに県内外の研究者や地元をはじめ行政関係者等によって学術調査や遺跡重要確認調査が実施され、貴重な資料や研究報告が提供されている。また、奄美大島地方での土器編年上、標識となる遺跡や学史的にも考古学研究の基礎を築いた遺跡が多い。

伊仙町の遺跡には、貝塚として、喜念貝塚、佐弁貝塚、面縄貝塚郡、東浜貝塚、犬田布貝塚等が周知されている。以下、概観してみたい。

喜念貝塚は、喜念小学校の南側から南西部にかけての海岸砂丘に形成された遺跡である。昭



第1図 墓念原始墓及び墓念クバンシヤ遺跡と周辺遺跡

和7年に地主の松田松栄氏により発見され、同8年廣瀬祐良氏、同10年三宅宗悦氏、同31年九学会連合奄美大島共同調査委員会考古班等により発掘調査が実施されている。三宅氏の調査においては、土器、小兒人骨・珊瑚礁製の敲石・貝輪等が、九学会の調査では、宇宿上層式土器が主で、上層沈線文土器・細隆起文土器・磨製石斧片・牙製飾等の出土報告がなされている。さらに、昭和50年には伊仙町の水害の際、一部が包含層が露呈し宇宿下層式土器を包含する層が確認され、宇宿下層式土器・貝製品等が発見されている。また、砂丘北側の畑地で貝札も表採されている。^{1, 3}

佐井貝塚は、佐井字東ミヤドにあり、マエビラの谷から喜念浜へ出た所の西側台地に位置している。昭和50年の水害の際、表土の流失により遺物包含層の露呈している所を喜山久儀氏が発見し、義憲和氏により確認され、同年12月白木原・義両氏により踏査されている。遺物は、沖縄県の伊江島貝志原貝塚などの出土土器と類似し、九州本土の弥生式土器や石器等の出土の報告がなされている。¹

東面縄貝塚は、面縄川の河口を利用した港湾があり、その手前500m付近の旧河床の岩陰にある。昭和29年園分直一・三友園五郎両氏により発見され、宇宿上層式の土器と外耳土器の出土が報告されている。

面縄貝塚群は、4つの貝塚より構成されている。

面縄第1貝塚は、面縄小学校より西側へ約200mの南東に開口する隆起珊瑚礁で形成されている狭小な谷状地形のところ所に所在している。同貝塚は、昭和3年大村行信氏、同5年廣瀬祐良氏、同5・6年小原一夫氏、同10年三宅宗悦氏等により発掘調査が実施されている。昭和5年の調査では、廣瀬氏が調査し、山崎五十磨氏により整理されている。その報告によると土器破片は、無文のものと同刻文をもつ凸帯を口縁部付近に持つものがあり、ともに深鉢形類似の土器で、底部には、丸底と平底とがあり、なかには細長い上げ底もあるとされている。石器としては、錘石・凹石・敲石等があり、貝製品には、夜行貝製の半皿形の食器様なもの、骨器として釣針が出土している。同5年の小原氏の調査においては、貝層下部より開元通宝1枚が出土している。本貝塚は、すでに消滅したと報告されていたが、昭和57年同町教育委員会の調査によれば、遺跡の範囲拡大と縄文時代早期から歴史時代までの複合遺跡で、貝塚・洞穴・開地の遺跡であることが判明している。遺物としては、青磁・陶器・兼久式土器・山ノ口式系統土器・市来式土器・爪形文土器等の土器破片、貝輪・垂飾品・有孔貝製品・螺蓋製貝斧・貝匙・貝容器・穿孔貝等の貝製品、石器として抉りのある石斧、古銭として開元通宝、自然貝として47種類が確認され、他に動物骨、魚貝等もみられる。遺構としては、第1洞穴より埋葬施設を検出し、散乱骨と埋葬人骨が出土した。^{1, 3, 4, 9}

面縄第2貝塚は、面縄小学校東隣で、第1貝塚より東側へ約250mの所に位置し、下面縄集落のほぼ中央を流れる面縄川によって開析された隆起珊瑚礁上に堆積する標高6mの砂丘上に所在し、この砂丘を取り巻くように面縄川の支流が流れている。同貝塚は、昭和5年小原一夫氏により発見され、同年中山英司・山崎五十磨・小原一夫の各氏により調査され、同10年三宅宗

悦氏、同28年河口貞徳氏、同29年三友国五郎・国分直一・重久十郎の各氏、同31年九学会奄美大島共同調査委員会考古班により調査が実施されている。昭和5年調査時の遺物は、大山柏氏と協同研究され、土器はすべて伊波・萩堂系のもので、石器として石斧、貝製品として、貝輪・貝匙・穿孔されたスイジガイの管状突起の先端を磨いて刃をつけた特殊な遺物等が出土している。同31年の九学会の調査では、国分・河口・曾野の各氏等が参加されて成果をあげられている。遺物としては、無文土器・沈線文土器・爪形文と刺突文土器・刺突沈線文土器等が見られ、文様により4分類されている。土器の他に貝輪・貝匙・骨製の装身具等の貝製品、尖頭器、石斧、砥石等の石器、自然貝、動物骨、魚骨等が出土している。その後、昭和57年に同町教育委員会が調査を実施し、嘉徳Ⅰ式土器と共存する珊瑚塊を敷いた住居跡と思われる遺構を検出している。遺物としては、嘉徳Ⅰ式土器・嘉徳Ⅱ式土器等の土器破片、自然貝、動物骨等の出土のみで、石器、貝製品等の出土は見られていない。^{1. 3. 4. 9}

面縄第3貝塚は、兼久貝塚と呼ばれ、第2貝塚の北東側約230mの傾斜地で、珊瑚礁崖と棚状台地からなり、洞穴と貝塚からなる遺跡である。この貝塚は、昭和29年九学会奄美大島共同調査委員会考古班の河口貞徳氏により発見された遺跡である。調査の結果、出土した土器を兼久式土器と仮称され、現在においては、兼久式土器の標式遺跡である。その後、昭和59年に同町教育委員会により調査を実施した。遺構としては、東部洞穴、第1洞穴、第3洞穴を発見した。遺物としては、兼久式土器・面縄前庭式土器・嘉徳Ⅰ式土器、喜念式土器等の土器破片、磨石・石皿・チャートの割片等の石器、貝匙、穿孔貝、螺蓋製貝斧等の貝製品、自然貝等が出土している。^{1. 3. 4}

面縄第4貝塚は、面縄小学校の北側約120m、第2貝塚の北側約150mの位置で、西兼久661番地所在し、砂守氏宅裏の隆起珊瑚礁の崖地にあたり、南面する隆起珊瑚礁の洞穴とその前方に続く前庭部から成っている。本貝塚は、昭和29年国分直一・三友国五郎の両氏により発見され、同31年九学会奄美大島共同調査委員会考古班の国分直一・河口貞徳・原口正三・野口義磨の各氏により調査が実施されている。その結果、土器は、爪形一爪形沈線一沈線一凸帯沈線一宇宿上層の偏年が推定され、土器の他に石器、骨角器、人骨、動物骨等が出土している。その後、同町教育委員会が調査を実施し、隆起珊瑚礁の洞窟部とその前庭部から成り、洞窟部は、東西2ヶ所に形成され、東洞部は2ヶ所の小洞窟から成っている。東洞部の遺物は、室川下層式土器と呼称を与られている一群に比定される土器・貝殻条痕文を施す土器・春日式土器に比定できる土器・斜縄文が施されている土器・面縄前庭式土器に比定される土器・羽状の沈線を横位に施すもので、仲泊式土器の系統と考られる土器・面縄東洞式土器に比定できる土器・口縁部の断面が三角形に肥厚する土器等の土器破片、磨製石斧・凹石・石皿等の石器、螺蓋製貝斧・有孔貝・貝匙等の貝製品、骨製品、獣骨、魚骨、自然貝等が出土している。西洞部の遺物は、室川下層式土器の呼称を与えられた一群に比定できる土器・貝殻条痕文を施す土器・面縄前庭式土器に比定できる土器・沈線文を施す土器・面縄東洞式土器・嘉徳Ⅰ式土器・嘉徳Ⅱ式土器等の土器、磨製石斧・磨石・凹石・砥石・石皿等の石器、螺蓋製貝斧・貝容器・貝匙等

の貝製品、自然貝、動物骨、魚骨等が出土している。^{1, 3, 4, 9}

大田布貝塚は、大田布宇連木竿 1,152番地にあり、この付近は、旧河川の河床にあたり東西に連なった高さ数mの珊瑚礁崖に南北から狭まれ長さ 500mほどの低地があり、遺跡はその南側の崖に形成された岩陰部を中心に広がっており、約50mにわたり貝層が露呈している。本貝塚は、昭和47年岩井正一氏が発見し、同48年白木原和美氏により調査され、同50年小林辰雄文化庁技官による保護対策の指導がなされている。その後、昭和58年同町教育委員会が調査を実施した。遺物には、面縄西洞式系統の土器・伊波と西洞式系統の土器、喜念Ⅰ式土器・宇宿上層式土器等の土器破片、磨製石斧・打製石器・磨石・敲石・凹石・石皿・チャート剥片等の石器、貝刃・螺蓋製貝斧・管状突起製ヘラ状利器・刺突貝・螺輪製刺突貝・貝鎌・貝匙・貝輪・垂飾品・簪・耳栓・貝錘・釣針等の貝製品、糞石、自然貝、動物骨等の出土があった。⁵

貝塚以外では、本川遺跡、貝輪や人骨が検出された本遺跡である喜念原始墓、洞穴遺跡としてヨツキ洞穴、近年では、岩陰や砂丘以外でも遺跡の発見が見られ、標高 235mの喜念上泉袋には、宇宿上層式土器と石斧が採集された喜念上原遺跡、陶・磁器を多く出土するミンツキ集落跡、完形の青磁12点が工事中に発見された面縄按司城（通称ウガンウスジ）等の遺跡が知られている¹。最近では、南西諸島でナゾとされていた類須恵器を伴出する古窯跡が地元研究者によって発見されたカムイヤキ古窯跡、その後、発見されたヤナギダ古窯跡等の遺跡が周知されている。以下、概観してみたい。

本川遺跡は、伊仙町と徳之島町の境を流れる本川の近くで、標高約50mの東向の台地の先端部に位置している。本遺跡は、地元の研究者により土器破片が表採されている。⁶

ヨツキ洞穴は、阿三ヨツキに所在し、イキントウと通称されている台地の森にある。伊仙町の水源地である尺八池の南側で、北西に開口している洞穴である。本洞穴は、昭和59年にカムイヤキ古窯跡周辺分布調査中、地元研究者義憲和氏により発見された遺跡である。昭和60年同町教育委員会により調査を実施した。遺物としては、陶質土器・喜念Ⅰ式土器・室川下層式土器・嘉徳Ⅱ式土器・面縄前庭式土器・面縄東洞式土器・大山式土器・宇宿上層式土器・弥生相当期の土器め縄文後期の土器等の土器破片、サメ歯製垂飾品・貝玉・貝鎌等の貝製品、魚骨、動物骨、自然貝等が出土した。⁶

喜念上原遺跡は、喜念集落より手手へ約4kmの標高約253mの喜念上泉袋に位置している。本遺跡は、昭和52年緒方順氏（徳之島高校教諭）等により発見され、宇宿上層式土器、石斧等が表採されている。¹

ミンシキ集落跡は、伊仙の北側に位置し、ミンツキと呼称されてある一帯で、昭和50年土地改良事業に伴う耕地整理が実施された際、義憲和氏により発見され、青磁片・南蛮陶器片・類須恵器片、石皿等の石器類が採集されている。また、同年南日本文化研究所の伊仙町の学術調査の際、白木原和美氏も踏査され、この一帯は古い時期から大陸との交流があったことが指摘されている。¹

カムイヤキ古窯跡群は、町の中心地より北側へ約3km経てた県道31号線の阿三から馬根ダム

へ向う町道脇の阿三カメヤキの山中にあり、周辺は狭小な谷が形成されている。カムイヤキ古窯群は、第1支群と第2支群に分かれており、第1支群は、標高約170mでため池（巾45m）の南に面した傾斜地に、第2支群は、第1支群の奥約50m経て南に面した傾斜地に、各々位置している。本古窯群は、昭和56年溜池等整備事業（木之又地区）に伴う事業区内の通称亀池の掘削断面に遺物片が散乱し、周辺に炭と遺物片が含まれている部分と窯壁の露呈している部分を地元の四本延宏氏により発見され、同町教育委員会へ連絡するとともに、文化財審議会委員長義憲和氏と範囲確認のために再度現地調査を実施し、亀焼池の西側約50mの傾斜面の裾部にも灰原らしき層が露呈しているのを発見している。その後、昭和59年同町教育委員会が発掘調査を実施した。その結果、第1支群の亀焼池の掘削断面には10ヶ所の窯跡・灰原、第2支群には、7基の窯跡が確認された。さらに、同町教育委員会は、溜池工事で水没する第1支群の調査を同年に実施した。窯の立地は、ハツ手状に延びた隣接する丘陵の傾斜面を利用（第1支群が東向き、第2支群は南向き）し、窯構築部分は、全て削り抜き易い花崗岩の基盤層であり、粘土や焼物の素材には充分で、窯の構造は、窯体長約3.6mを測り、焼成部の幅が1.3mから焼成部の幅が2.0mで急に広がる平面形のいわゆるイチヂク形を呈しており、焼成部は、42度の急傾斜角度をもつ床面に、粘土塊（焼台）を配置する特徴的なものであったと報告されている。遺物の器種は、甕・壺・鉢・碗の4種であり、甕は、広口の大甕である。壺は、大型のもの（壺A・壺B）、普通の大きさのもの（壺C・壺D）ものがあり、鉢は、大鉢・中鉢・小鉢に分られ、その他に注口等が出土している。^{7・8}

ヤナギタ古窯跡は、ヨヲキ洞穴の北北西約130mの所にあり、洞穴開口の畑地一枚隔てた森の中に所在し、昭和59年に調査を実施したカムイヤキ古窯跡に近距離にある。本古窯跡は、昭和60年のヨヲキ洞穴調査時に、調査担当者により発見され、6ヶ所の灰原と1ヶ所の焼土らしい痕跡や類須恵器の破片が採集されている。⁹

これらの遺跡の他に町内には、隆起珊瑚礁の岩陰部や洞穴内を利用したトフル墓が数多く確認されている。喜念原始墓の北側の約370mの県道沿いの岩陰内には、数多くの人骨の埋葬の葬所があり、一部県道工事により影響を受けている。さらに、原始墓周辺では、原始墓より北北西約700mの岩陰部にトフル墓が確認されている。このように、町内では、数多くのトフル墓が確認され、一部のトフル墓については、調査が実施されているが、今後は、所在の確認と遺跡地名表等の作成や各分野での合同の学術調査が必要であろう。

第1表 喜念原始墓と周辺遺跡

番号	遺跡名	所在地	備考	文献
1	喜念原始墓 喜念クパンシヤ遺跡	伊仙町喜念	3ヶ所に岩陰墓、喜念Ⅰ式、宇宿上層式、貝輪、人骨	本文
2	ヤナギダ古窯跡	伊仙町阿三ヤナギダ	古窯跡（陶質土器）	6
3	カムイヤキ古窯跡	伊仙町阿三亀焼	古窯跡（陶質土器）	7, 8
4	犬田布貝塚	伊仙町犬田布連木竿	面縄西洞式、犬田布式、貝器、鹿角	5
5	瀬田浜遺跡	伊仙町西伊仙	貝輪（オオツタノハ）	6
6	ミンツキ集落跡	伊仙町伊仙	陶器、磁器、陶質土器、石斧	1
7	面縄第1貝塚	伊仙町面縄	箱式石棺、貝輪、市来式、兼久式	1, 3, 4, 9
8	面縄第2貝塚	伊仙町面縄	住居跡、嘉徳Ⅰ・Ⅱ式、貝器	1, 3, 4, 9
9	面縄第3貝塚	伊仙町面縄	嘉徳Ⅱ式、兼久式、石皿、磨石	1, 3, 4
10	面縄第4貝塚	伊仙町面縄	春日式、面縄前庭式、面縄東洞式、面縄西洞式	1, 3, 4, 9
11	面縄東浜貝塚	伊仙町面縄	土器、貝製品	3
12	佐弁貝塚	伊仙町佐弁東ミヤド	兼久式、弥生相当土器	1
13	喜念貝塚	伊仙町喜念兼久	嘉徳Ⅰ式、宇宿上層式、喜念Ⅰ式、貝札	1, 3
14	ヨロキ洞穴	伊仙町阿三ヨロキ	陶質土器、喜念Ⅰ・Ⅱ式土器・面縄前庭式、貝鏡	6
15	本川遺跡	伊仙町喜念本川	土器破片	6
16	喜念上原遺跡	伊仙町喜念上泉袋	宇宿上層式、石斧、磨石	1
17	面縄按司城	伊仙町上面縄	青磁完形瓦	10

〈参考文献〉

1. 義憲和『伊仙町の歴史』『伊仙町の自然・社会環境』伊仙町誌 1978
2. 三宅宗悦『大隅國徳之島喜念原始墓出土貝製品及び出土人骨の抜歯に就て』考古学雑誌 三十三卷 第十號 1943
3. 白木原和美『徳之島の先史学的所見』南日本文化 第3号 1970
4. 吉永正史・牛ノ浜修他『面縄貝塚群』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(4) 1958
5. 吉永正史・宮田栄二他『犬田布貝塚』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(2) 1984
6. 牛ノ浜修・井ノ上秀文『ヨツキ洞穴』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(6) 1986
7. 新東晃一・青崎和憲他『カムイヤキ古窯跡群Ⅰ』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 1985
8. 新東晃一・青崎和憲他『カムイヤキ古窯跡群Ⅱ』伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(5) 1985
9. 河口貞徳共著『徳之島の先史遺跡調査報告』人類科学 第10集 1958
10. 伊仙町歴史民俗資料館展示資料
11. 山崎五十磨『鹿児島県大島郡徳之島貝塚に就いて』考古学雑誌 第20巻10号 1930
12. 三友国五郎・国分直一『徳之島面縄貝塚調査報告 面縄第2貝塚と付近の貝塚』古代学第8巻2号 1959
13. 河口貞徳『南東先史時代』鹿児島大学南方産業科学研究報告書 第1巻2号 1956
14. 九学会連合『徳之島面縄第4貝塚調査報告』〔奄美その自然と文化〕 1959
15. 白木原和美・義憲和『大島郡伊仙町の先史学的所見』南日本文化 第9号 1976
16. 三宅宗悦・藤岡謙次郎『徳之島出土の貝塚土器に就いて』考古学雑誌 第11巻5号 1940

第3章 遺跡の概要

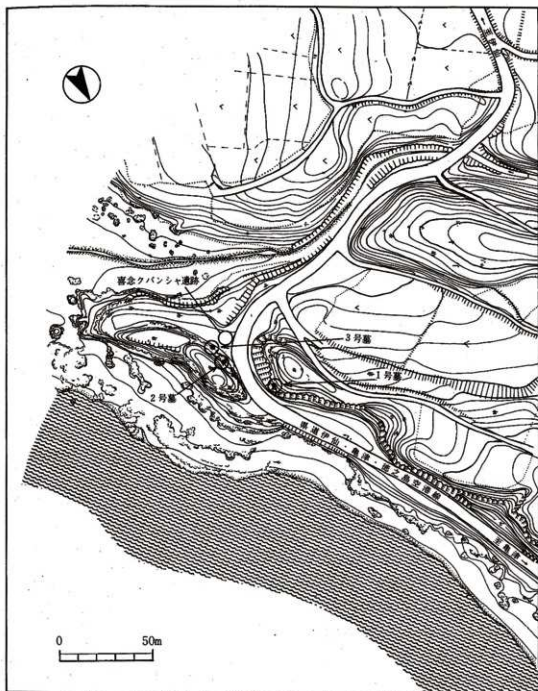
喜念原始墓は、昭和9年県道工事中、廣瀬祐良氏により発見されたのが最初である。その翌年には、三宅宗悦氏により発掘調査が実施され、その後、発掘調査報告がなされている。

本原始墓は、「海岸にほど遠くない珊瑚礁の南面する岩陰であって、現在破壊しているが、嘗て洞窟をしていたと思われる」と報告されている。調査は、約一坪程の面積で、十数例の人骨と百数十個の貝器や土器等が出土し、人骨及び遺物は、「隆起珊瑚礁の前方の高さ約三尺位の埋土中より見出された。人骨は無秩序に含まれ、或者は炭酸石灰の為に土の中に堅くとじこめられ、貝製品も亦亂雑に存する事が多く時には貝輪が三、四個重なって発見される事もあったが、人骨の前膊等に通したみのは見られなかった。」とあり、土器の中には、凸帯のある胴部破片等があり、出土量は少なく、所謂南島式土器の範疇にはいるものであるとされている。このように、南島諸島における古代葬制で、原始墓の位置づけや華麗な貝器類の存在や出土人骨の下顎骨のなかで抜歯されたものがあったことは、本遺跡を価値づけるものであると述べられている。

その後、本原始墓は、長年の間、喜念の県道伊仙・亀津・徳之島空港線が急カーブする西側沿いで、隆起珊瑚礁の岩陰に珊瑚礁で詰石が施されている所とされていた。しかし、調査の結果、岩陰内は、上部まで茶褐色粘質土が堆積しており、その堆積土のなかには、珊瑚礁は大小の礫が混入し、亀裂部から粘土粒の侵入や落石等が考えられ、当時の原始墓の可能性は薄くなった。そこで、原始墓の所在確認のために、周辺部の岩陰を中心に確認調査を実施し、3ヶ所の岩陰部で人骨の検出をみた。

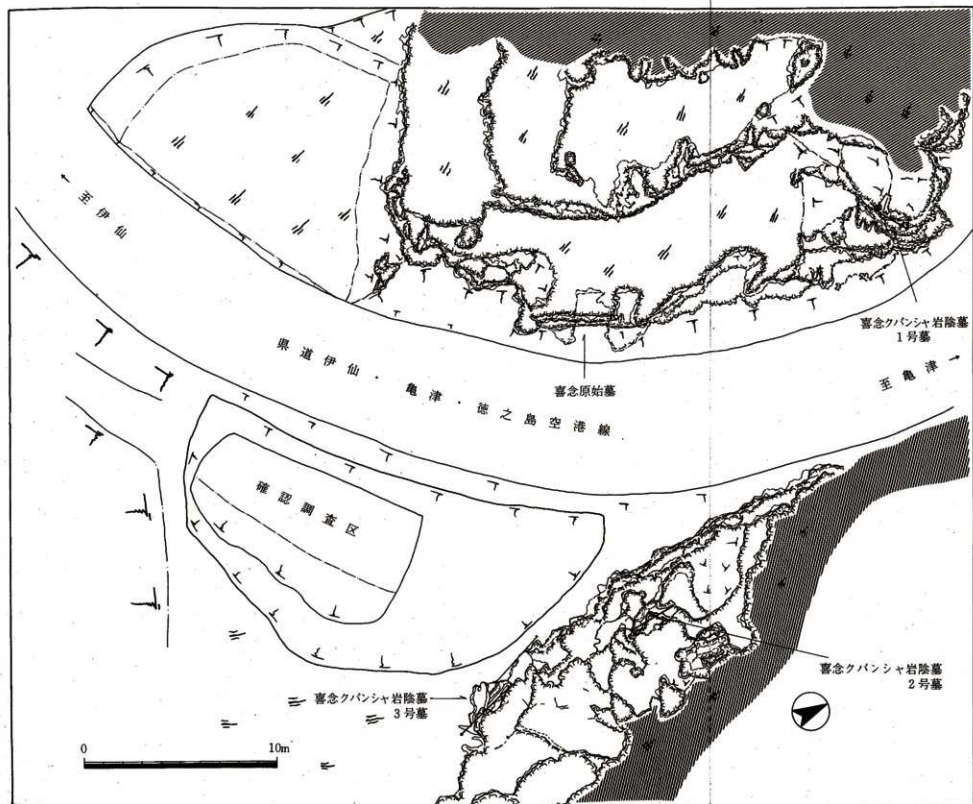
その結果、3ヶ所において葬所と考えられる岩陰部を検出した。そこで、喜念クバンシャ岩陰墓1号墓、喜念クバンシャ2号墓、喜念クバンシャ岩陰墓3号墓と呼称し、喜念原始墓の名称と区別するためである。さらに、周周辺の岩陰部の調査や荒地においては、トレンチによる確認調査も実施したが、トレンチ内の攪乱層より人骨片、土器破片、貝製品、石器等の出土があったが、扁平な楕円礫等と混在していた。その後、周辺の岩陰太での調査では葬所と考えられる施設は検出できず、当初の3基のみであった。

喜念クバンシャ岩陰墓1号墓は、県道沿いの東側隆起珊瑚礁崖上の岩陰部で、県道との比高差は約3mを数え、南東面する岩陰部で約250cm×約150cm程のテラスに、最大約170cm×約120cmの範囲に外部より搬入したと思われる礫で箱状式の組んで葬所を造り出している。その葬所内の基盤は隆起珊瑚礁で赤色粘土と腐植土が基盤上にあり、その埋土中より人骨片、骨製品、貝殻等が出土した。2号墓は、県道東側沿いの隆起珊瑚礁崖上の岩陰部で、1号墓とレベル的に同じ位置に葬所を設け、約170cm×約110cmのテラスに、最大約150cm×約60から90cmの範囲に、1号墓と同様に外部より礫を持込んで葬所を造り出している。基盤は、隆起珊瑚礁で赤色粘土や腐植土が埋土として確認でき、複数の人骨片、オオツノハ製の貝輪、貝殻等が出土した。人骨片の一部は焼け細片が多かった。3号墓は、2号墓の近くで隆起珊瑚礁の岩陰内にあ

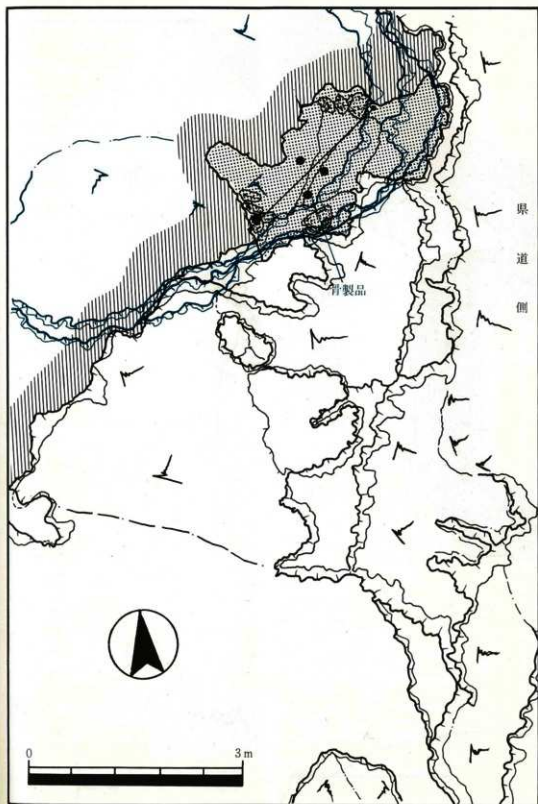


第2図 喜念クバンシャ岩陰墓・喜念クバンシャ遺跡及び周辺地形図

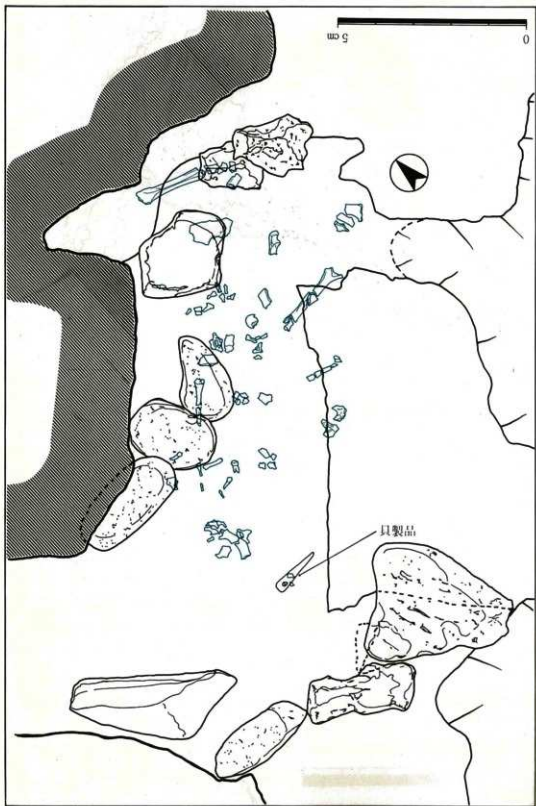
り、ほぼ国道とレベル的には同じか喜念原始墓と同レベルか、或いは、その前後のレベルが推定される。また、1号墓や2号墓と岩陰や葬所の状況を異にし、外部より礫の搬入もなく、テラスは最大約330cm×約205cm程を測り、基盤である隆起珊瑚礁の上に赤色粘土や腐植土を確認し、その層中より少量の人骨片、貝殻類、土器小破片の出土があった。また、周辺より人骨片や土器砂片の出土があり、二次的な移動が考えられる。喜念クバンシャ遺跡は、国道東側の荒

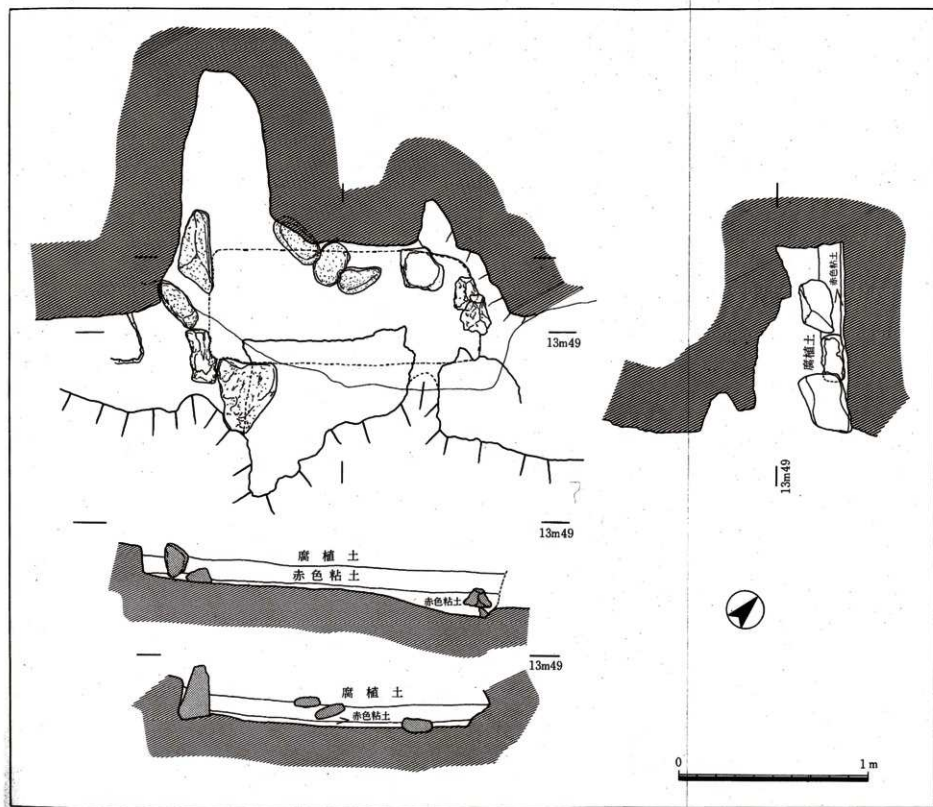


第3図 喜念クバンシャ岩陰墓・喜念クバンシャ遺跡の位置及び地形図



第4図 喜念クバンシャ岩陰墓1号墓位置図





第6図 喜念クバンシャ岩陰墓1号墓実測図

地にトレンチによる確認調査を実施した。その結果、2号墓や3号墓の隆起珊瑚礁側は、その延長やかなりの客土が確認でき、珊瑚礁が集積した状態で混入した5層灰黒褐色土の層より人骨片、土器破片、陶器破片、貝製品、貝殻等が混在して認められ、一部摩滅を受けている。

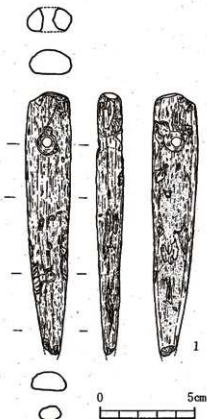
第2節 喜念クバンシャ岩陰墓1号墓の概要 (第4~7, 図版3~5, 12)

1号墓は、喜念の集落より北西側へ約600mの所にあり、県道伊仙・亀津・徳之島空港線が急カーブする県道西側沿いの隆起珊瑚礁崖上で標高約13.5mを数える岩陰部で、喜念原始墓推定地より北側約15mを測る岩陰部のテラス凹部に位置する。

葬所は県道面より比高差が約4mを測る岩陰部内で、その岩陰部は南東面しているために県道へ若干突出したような位置にある。岩陰部のテラス面は、不整形であるが約250cm×約150cmを測り、その基盤である隆起珊瑚礁の凹部の堆積土部分を利用し、約170cm×約120cmの範囲に外部より搬入したと思われる大きいもので約40cm×33cm×30cm、小さいもので約17cm×12cm×10cm程の礫数個で箱式状に組んで葬所を送り出している。その葬所には、基盤である隆起珊瑚礁の上に赤色粘土や腐植土の堆積があり、その堆積土より人骨片、骨製品、貝殻等が検出でき、礫組みの内径の下部床面が約140cm×約60cmの範囲が推定できる。

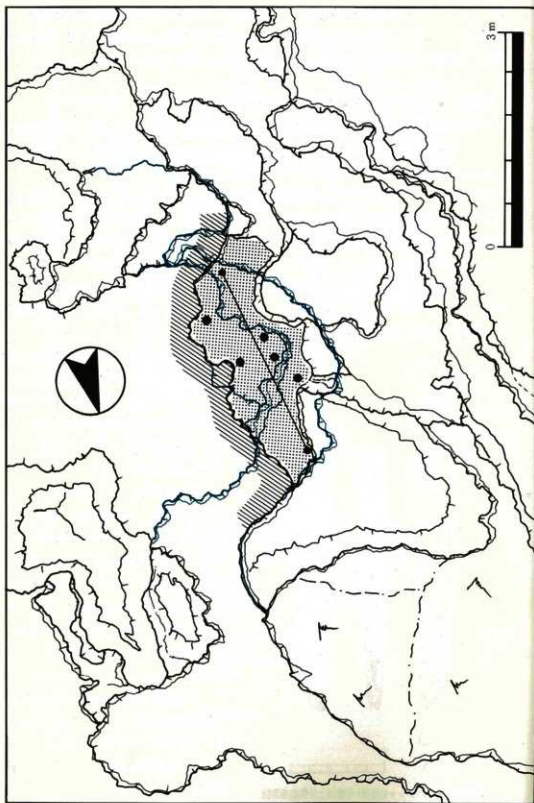
葬所内より出土した人骨は、埋葬されたままではなく、人骨が雑然と包含されていた状況で、頭蓋、椎骨、上腕骨、尺骨、大腸骨、歯骨等で小児骨を含み複数体の人骨が埋葬され、分析の結果、出土骨片数は、183と歯骨13の数があげられている。

その他の遺物として、骨製品、オオベッコウガサガイ、小動物骨片などが人骨とともに出土した。1は、動物骨種不明であり、その先端部が欠損しているが、刺突機能を有し、着柄加工をもたず、尖った刺突部と反対側に穿孔部もつもので、現存全長13.7cm、最大幅2.3cm、最大厚1.4cmを測り、穿孔部は、両サイドから穿孔され、一方が1.0cm×1.14cm、もう一方が1.1cm×1.1cmで、穿孔の内径が0.6cm×0.55cmを測る。全体が精巧な造りのもので、また全体が入念に研磨され、頭部が丸く造られている。このような基本的形態からみて、太型針と類似している。

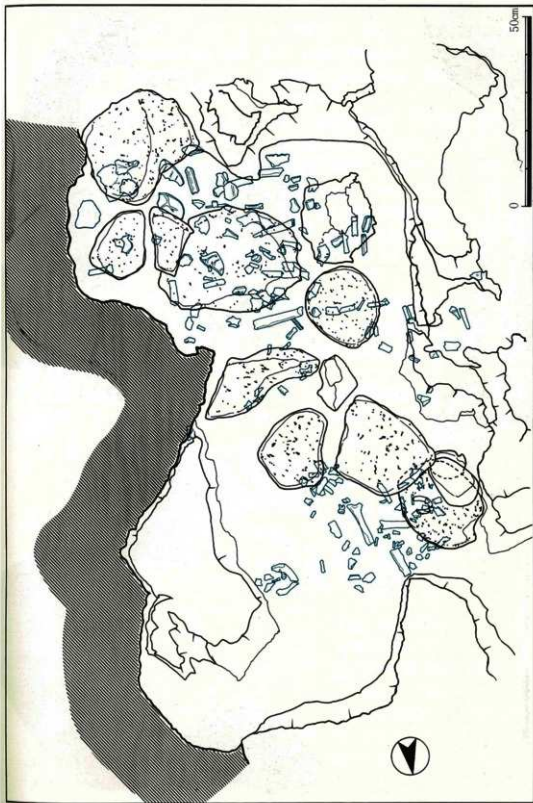


第7図 喜念クバンシャ岩陰墓1号墓出土骨製品実測図

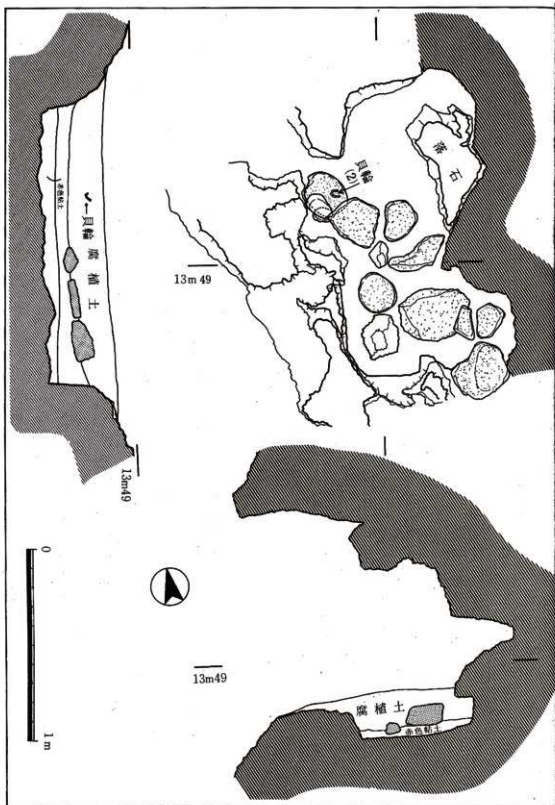
※出土地域からみて、陸性動物ではなく海性(クジラ類)動物であろう。



第8号 喜念クバンシャ岩陰墓2号墓位置図



第9図 鎌倉ヶ丘シヤンヤ山遺跡2号墓人骨出土状況実測図



第10図 喜念クバンシャ岩陰基2号基実測図

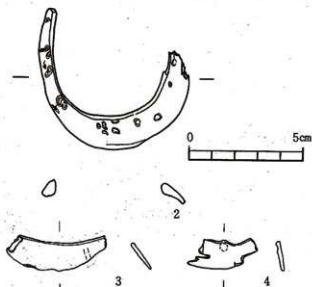
第2節 喜念クバンシャ岩陰墓 2号墓の概要 (第8~11, 図版3, 6から8, 12)

2号墓は、喜念の集落より北西側へ約600mの所にあり、県道伊仙・亀津・徳之島空港線が急カーブする県道東側沿いで海岸へ細長く突出した隆起珊瑚礁の崖上で標高約13.5mを測り、1号墓と同レベルの岩陰部で、1号墓より県道を隔てて西東側約22m、喜念原始墓の略等側約15mを測る岩陰部で隆起珊瑚礁のテラス凹部に位置する。

葬所は、県道より1号墓と同じく比高差が約4mを測る岩陰内で、その岩陰部は南西面している。岩陰部のテラスは、不整形であるが最大で約170cm×110cmを測り、その基盤である隆起珊瑚礁凹部の堆積土を利用し、最大約159cm×約90cmで片方が中窪み状を呈する範囲に外部より搬入したと思われる大きいもので約43cm×28cm×20cm、小さいもので約10cm×10cm×8cm程の礫数個で箱式状に組んで葬所を造り出している。テラス凹部内の北西隅には、天上より隆起珊瑚礁の大きい固まりの落石があり、岩陰内の天上部の一部は焼けた痕跡を認めた。その葬所は、基盤である隆起珊瑚礁の上に赤色粘土や腐植土の堆積があり、その堆積土より人骨片、貝製品、貝殻等が混在した状態で出土した。

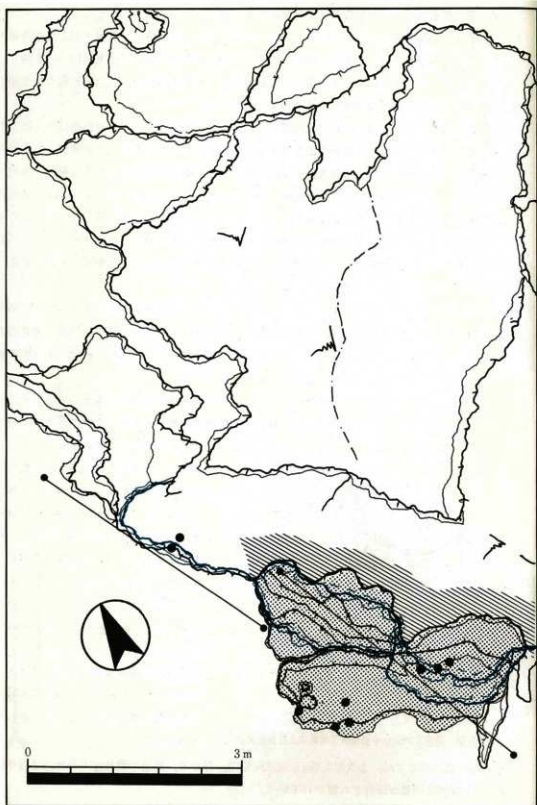
葬所内より出土した人骨は、細片が非常に多かったが、2次埋葬の状況は考えられず、骨片が散乱した状況で包含され、頭蓋、下顎骨、椎骨、肩甲骨、手指骨、大腿骨、脛骨、歯骨等の複数体の人骨片である。また、人骨の一部は焼けた痕跡が確認でき、分析の結果、出土骨片数は、755と歯骨9の数があげられている。

人骨以外に堆積土より出土した遺物としては、自然に郭頂部が節理きたオオツタコウガサガイの貝殻、オオツタノハガイを利用した貝輪片、小動物骨片等が人骨片とともに混在して出土

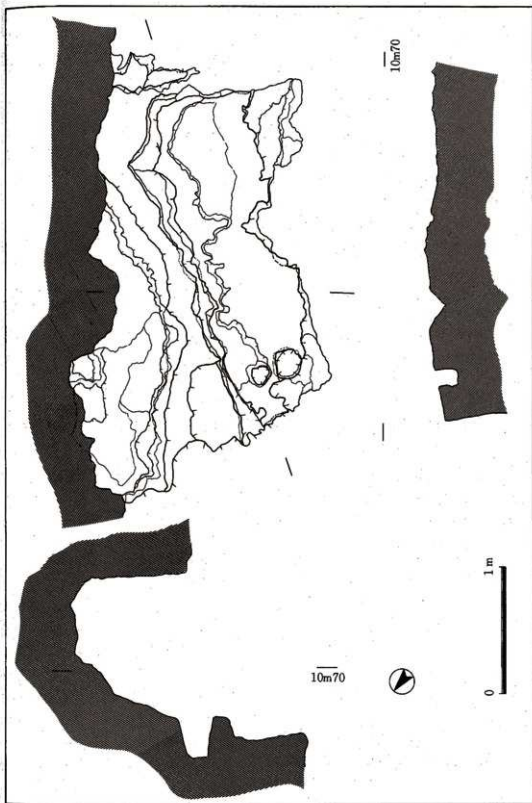


第11図 喜念クバンシャ岩陰墓2号墓出土貝製品実測図

が認められた。2から4は、オオツタノハガイを素材として用いた貝輪の破片で、2は、約半分ほど遺存し、現存長径6.1cm、現存短径6.6cm、現存最大厚0.5cm、重さ14gを測るもので、郭頂部を除去して環状の外縁部を用い、放射肋を磨いて凹凸部をなくしたものである。3は、現存長径1.7cm、現存短径4.4cm、現存最大厚0.2cmを削り、貝殻の長径部分の大半を欠損し、わずかに貝殻の環状部外縁を残し、その部分は磨かれ、外縁部の内側は自然節理した部分を確認でき、放射肋は磨いて凹凸部をなくしている。4は、最大長径1.4cm、最大短径3cm、最大厚0.2cmを測る貝輪の一部分で、貝殻の環状部の外縁部は自然節理し、内縁部は一部が確認され磨かれている。



第12図 喜念クバンシャ岩陰基 3号基位置図



第13図 喜念クバンシヤ岩坑第3号基岩区

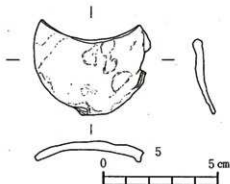
第4節 喜念クバンシャ岩陰墓 3号墓の概要 (第12~15図, 図版9, 11, 12)

3号墓は、2号墓と同じく県道東側沿いで、海岸へ突出したような隆起珊瑚礁の南側崖面を利用した岩陰内にあって、2号墓の南側約7mで標高10.5mを測る所に位置し、当時の喜念原始墓とレベル的に同じかその前後が推定される。

葬所は、県道より比高差約1mを測る岩陰部で南西に面している。岩陰部のテラス面は、最大約330cm×約250cm程を測り、基盤はフィッシャーや凹凸面を呈する隆起珊瑚礁で、フィッシャーや凹凸面に赤色粘土や腐植土の堆積があり、その堆積土より土器破片、人骨片、貝製品、貝殻等が散逸した状態で出土した。このように葬所は、1号墓や2号墓のように基盤である隆起珊瑚礁の大きい凹部を利用したものでなく、隆起珊瑚礁のフィッシャーや凹凸面の堆積土を葬所として利用し、外部よりの礁等の持込みや凹部の掘込みも検出されず余り堆積土も見られない状況であった。また、全身骨は認めれず、少ない人骨片が散逸した状況で出土し、1次埋葬は考えにくい出土状況であった。

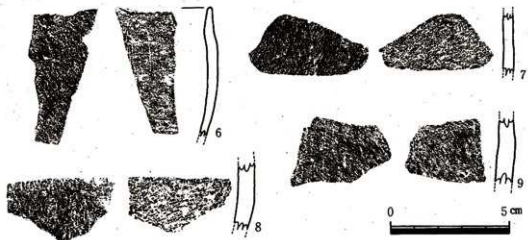
周辺を含めた葬所より出土した人骨は、全身骨はなく大腿骨、脛骨、足指骨等の部分骨で、分析の結果、周辺部を含め57の人骨片の数があげられている。

その他の遺物としては、土器破片、オオツタノハガイの貝製品、貝殻類等が出土した。また、隆起珊瑚礁のテラス面以外の周辺部より土器片や人骨片等の出土があり、二次的な移動が考えられる。5は、オオツタノハガイを利用した貝製品で、最大全長5.2cm、最大幅4.2cm、最大厚0.5cm、重さ12gを測る。三宅氏の報告によると、「庇型貝器と云ふべき特異な形態の一群であつて、學生帽の庇を面はせ」とある。貝の郭頂部を除去して環状に外縁部を利用したのが貝輪で、その郭頂部を含めた部分を利用し、一部欠損しているが周縁部は入念に研磨を施している。6から9は土器小破片のために傾きが不明である。7・9は、隆起珊瑚礁のテラス面より6・8は、周辺部より出土した。6は、口縁部から胴部にかけての破片で、内外面ともに赤茶褐色で、ナデ調整である。胎土には、石英、長石などの砂粒を含み、焼成は堅緻である。7



第14図 喜念クバンシャ岩陰墓3号墓出土貝製品実測図

は、内外面ともに茶褐色を呈し、外面はナデ調整で、内面は摩滅しているために不明である。胎土は、石英、長石などの微砂粒を含み、焼成は堅緻である。8は、内外面ともに暗茶褐色で、調整は両面ともに摩滅を受け不明である。胎土には長石、石英、角閃石などの微砂粒を含み、焼成は、良好である。9は、外面が暗赤茶褐色、内面が暗褐色を呈し、外面はナデ調整で、内面は摩滅のために不明である。胎土は、石英、長石などの微砂粒を多量に含み、焼成は堅緻である。



第15図 喜念クバンシャ岩陰墓3号墓出土遺物及び周辺出土遺物実測図

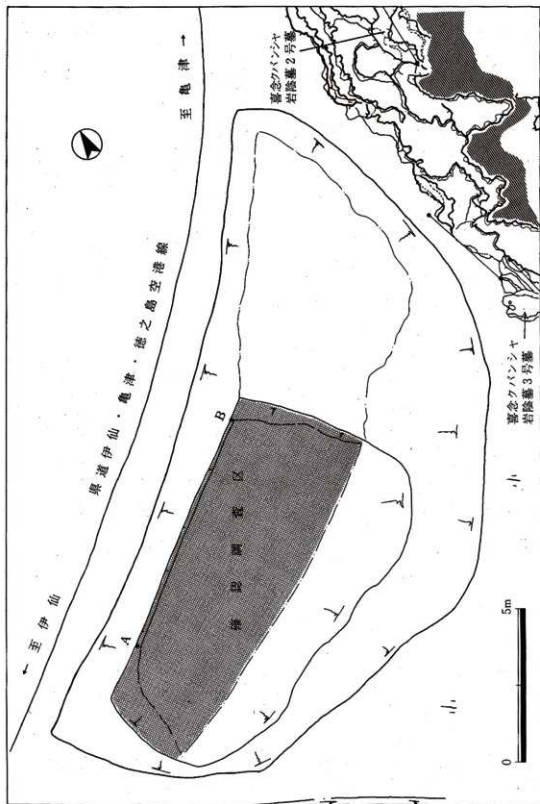
第5節 喜念クバンシャ遺跡の概要 (第16～20図, 図版10～12)

喜念クバンシャ遺跡は、県道伊仙・亀津・徳之島空港線沿い東側の標高約9.4mを測る荒地で、喜念クバンシャ岩陰墓3号墓の南西測沿いに位置する。

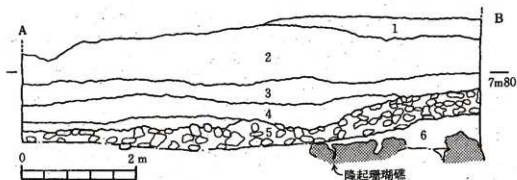
本遺跡は、喜念原始墓の調査の一環で、周辺部の確認調査としてトレンチにより調査を実施した地点であり、当地は不燃物等の破棄場所であり、その後の客土により造成された荒地に位置している。

調査は、初めに町当局の手により造成時の客土の除去作業から実施し、喜念クバンシャ岩陰墓3号墓周辺は、隆起珊瑚礁の延長が客土下に認められ、トレンチの位置を南西部の県道沿いに移動し設定した。このトレンチは、客土中に大きい隆起珊瑚礁の固まり等が無数に含まれ、その除去作業後の設定で不定形なトレンチとなり、県道面より約1.5mの比高差を測る。

層位は、県道沿いのためにトレンチ壁面上位部分が若干傾斜する格好となり、一部客土は、削平された状態である。1層は、灰褐色粘質土で客土の残層である。2層は、赤茶褐色粘質土で粒子がこまかく非常に粘質が強く乾燥するとクラックが発達する。3層は、赤茶褐色粘質土で、小礫をたくさん含み、粒子がこまかく非常に粘質が強く乾燥するとクラックが発達し、2層と色調は同様であるが、小礫を含む点異なる。4層は、黄茶褐色粘質土で粒子がこまかく粘質が強い層である。1層から3層までが客土である。5層は、黒茶褐色粘質土で、非常に粘質の強い層となる。6層は、灰黒褐色で粘質が強く、粘質土と扁平や不定形の珊瑚礁礫との混土層で、珊瑚礁礫の間に粘質土を含んでいる状態である。この層より人骨片、土器破片、陶器片、貝製品、貝殻等が混在した状況で出土し、そのほとんどは摩滅を受けている。人骨片は114と歯骨1を数えた。7層は、明黒褐色粘質土で、5層と同じく珊瑚礁の礫を多く含み、非常に粘質の強い層である。各層は、南側及び東側へ大きく傾斜を確認する。



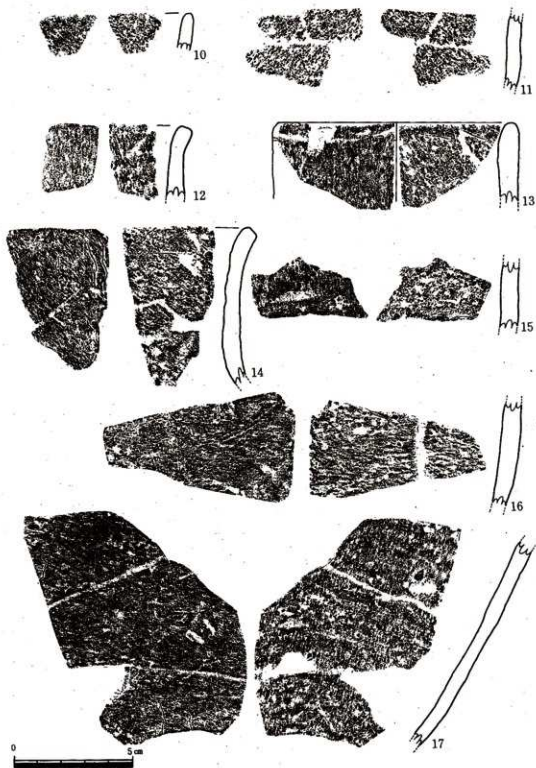
第16図 喜念クバンシャ遺跡トレンチ位置図



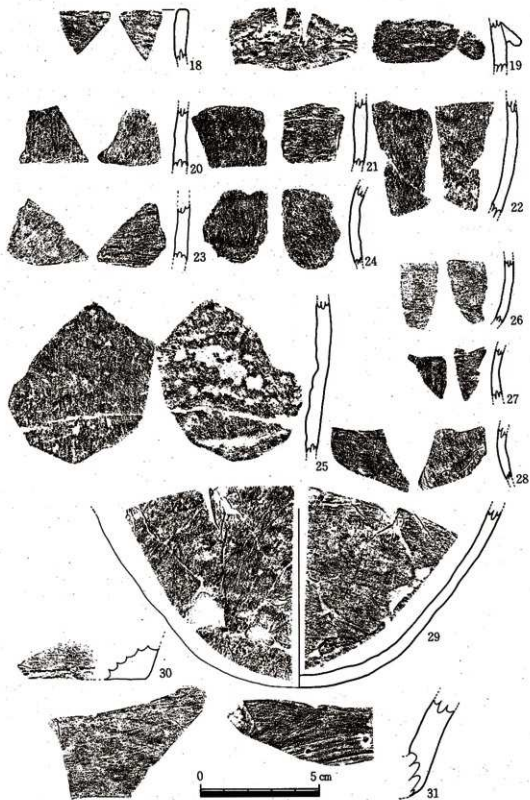
第17図 喜念クバンシャ遺跡土層断面実測図

遺物は、6層灰茶褐色粘質土で粘質土と珊瑚礁礫との混土层より人骨片、陶器、土器破片、貝製品、貝殻等が混在した状況で出土した。10から29は土器破片、30・31は陶器、32から34は螺貝製貝斧、35は穿孔をもつ貝製品、37は扁平な磨製石器である。

10から31までの土器破片等は、小破片のために傾きは不明である。10・11は、同一固体が考えられる土器破片で、10・12から14は口縁部破片である。10・11は、同一固体が考えられる破片で、11は、口縁端部に丸みをもつ破片で、10・11ともに色調が内外面ともに赤茶褐色で、調整は摩滅しているために不明である。胎土には石英、長石などのわりと大粒の砂粒を多量に含み、焼成はあまり良くない。12は、口縁部が若干外反し、口縁端部に丸みをもつ破片で、色調が内外面ともに明黄褐色を呈し、調整は摩滅しているために不明であり、胎土は石英、長石などの大小の砂粒を含み、焼成は良好である。13は、口縁部は直行すると思われ、口縁端部は丸みをもち、口縁部直下には破状を呈すると思われる一条の沈線を巡らし、器厚は厚い破片である。色調は外面が明茶褐色、内面が明褐色を呈し、調整は摩滅しているために不明で、胎土及び焼成は12と同じである。14は、口縁部が若干外反し、口縁端部は、丸みをもつ破片で、色調は外面が明赤茶褐色、内面が明黄褐色で、調整、胎土、焼成ともに12と同じである。15・16・17は、同一固体が考えられる破片で、調整、胎土、焼成ともに11と同様である。15は、部位不明の輪積みの痕跡を残す破片で、色調は外面が赤茶褐色、内面が灰黄褐色で、16は、部位不明の破片で、色調は外面が明赤茶褐色、内面が淡黄褐色で、17は、底部付近に近い破片であり、色調は外面が明茶褐色、内面が明赤茶褐色と淡黄褐色を呈する破片である。18は、口縁部破片で口縁端部に平坦面をもつ破片である。色調は内外面ともに明褐色を呈し、内外面がヘラナデ調整で、胎土は石英、長石などのわりと大粒の砂粒を多く含み、焼成は良好である。19は、外耳突帯をもつ小破片で、色調は外面が黄褐色、内面が赤茶褐色を呈し、内外面ともにナデ調整で、胎土や焼成は19と同様である。20は色調が内外面ともに茶褐色で、内外面がナデ調整が施され、内面は鮮明に磨跡を残し、20から29まで胎土は石英、長石などの微砂粒を含み、焼成は堅緻である。21は、色調が内外面ともに赤茶褐色で、外面は研ぎが施され、内面は指頭調整後ナデによる調整で、輪積みの手法痕を残す。22は、色調は外面が赤茶褐色、内面が褐色で、調



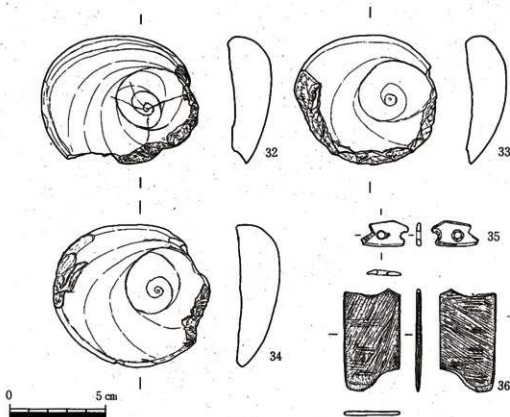
第18図 喜念クバンシャ遺跡出土物実測図



第19図 喜念クバンシャ遺跡出土遺物実測図

外面ともにナデ調整である。23は、色調は内外面ともに赤茶褐色で、ともにナデ調整を施し、特に内面は痕跡が鮮明である。24は、色調が外面で赤茶褐色、内面が茶褐色を呈し、若干摩滅を受けているがナデ調整である。25は、14から17と同一固体が考える破片である。すべてが14と同様である。26から29は、薄手の器壁をもつ破片で、ナデ調整が施されている。26は、色調は内外面ともに暗茶褐色を呈し、27は、色調が外面で明黒褐色、内面が暗褐色で、28は、内外面ともに暗褐色を呈している。29は、丸底をもつ底部破片で開きながら立上ると思われ、色調は外面が赤茶褐色や黄褐色、内面が赤茶褐色を呈している。30・31は、陶器の甕の底部破片である。

その他の遺物として、32から34は螺貝製貝斧で、夜光貝の蓋の薄い縁部に敲打により刃部をつくり出している。32は、最大長8.2cm、最大幅6.8cm、最大厚2.3cm、重さ150gを測り、下位から右側縁部にかけて刃部をつくり、摩滅を受けているために鋭利さを欠いている。33は、最大長7.5cm、最大幅6.8cm、最大厚2.2cm、重さ120gを測り、左側縁に右側縁にかけて刃部をつくりだし、摩滅を受けている。34は、最大長8.2cm、最大幅7.6cm、最大厚2.3cm、重さ172gを測り、左側縁と右側縁に刃部をつくり出し、摩滅を受けているために鋭利さを欠いている。35は、穿孔を二ヶ所にもつ貝製品で、最大長2.5cm、最大幅1.4cm、最大厚0.3cm、重さ10gを測り、両端部を欠損し、穿孔の大きさは、0.6cm×0.6cmを測り、一方は欠損して計測は不能で



第20図 喜念クバンシャ遺跡出土貝製品及び石器実測図

ある。36は、扁平の磨製石器で、現存全長5.6cm、最大幅3cm、最大厚0.25cm、重さ8.5gを測り、両面ともに擦痕が顕著に認められ、両端部ともに欠損しているが、先端部に刃部をもうけている。

第4章 まとめにかえて

喜念原始墓は、大島郡伊仙町喜念字ムテナウ 844番地他に位置し、昭和10年京都大学の三宅宗悦氏によって調査された遺跡で、各種の貝製装飾品、牙製装飾品、土器破片、抜歯人骨等が出土し、特に、抜歯人骨は、南西諸島初の出土として報告されている。

本原始墓は、長年の間、喜念の県道伊仙・亀津・徳之島空港が急カーブする西側沿いの隆起珊瑚礁の岩陰に珊瑚塊で詰石が施された所とされていた。調査の結果、三宅氏の調査された原始墓は、現在では破壊され存在していない。しかし、周辺調査で、隆起珊瑚礁の3ヶ所の岩陰部より人骨が検出され、喜念原始墓と区別するために喜念クバンシャ岩陰墓とした。検出の位置は、喜念原始墓に近接し、原始墓との関係が目される。

喜念クバンシャ岩陰墓は、喜念原始墓（昭和10年当時）と隣接した位置に1～3号墓の3ヶ所の葬所が検出され、人骨はすべて散在した状態で、全身骨格は皆無であった。1号・2号墓は、県道路面より約3mを測る岩棚で、ともに県道両脇にそれぞれ位置し、同レベルを測り、隆起珊瑚礁を基底とし、珊瑚塊の礫で箱式状に組んで葬所を造り出し、1号墓は2個体分で成人骨と小児骨で、2号墓は、焼骨を含め未成人骨や成人骨が出土し、小破片骨が多く正確な個体識別は不明であるとの報告がある。また、焼骨があることから岩陰部の天井は黒ずんでいたが、当時のものかは疑問が残る。人骨とともに、1号墓より穿孔を有する骨製品、2号墓より貝輪等が出土している。また、人骨の出土状況や副葬品等から三宅氏調査の「喜念原始墓」の出土遺物と近似するものがある。3号墓は、2号墓の東側下部の岩棚で、県道と同レベルの位置にあり、複数個体の人骨片と少量の土器片が出土した。また、外部より珊瑚塊の礫等の搬入はなく、1・2号墓の葬所と異にしていることより二次的な移動が推察される。土器については、胎土や色調から古い要素をもっているものの小破片で、時期を判断するには困難である。

さらに、周辺部の県道脇の海岸側において調査を実施したが、多数の珊瑚礫を含む攪乱層より人骨片、土器片、貝製品、貝殻等が混在して出土したが、周辺部よりの二次的な移動が考えられ、土器や貝殻等も摩滅を受け、土器等の中にも陶器を含めて出土し、所属年代のきめ手はつかめなかった。

調査の結果、貝製品と箱式石棺墓とは、近い関係かもしくは同時期か、また、貝製品の中で特に、ヒサシ形の製品と貝輪は喜念原始墓にも出土し、近い関係にあり、本来墓制自体は原始墓に近い様相があると判断している。

(参考文献)

小片丘彦・佐藤正史・峰和治・山本美代子「鹿児島県伊仙町(徳之島)喜念クバンシャ岩陰墓出土の人骨」(鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座) 1988 本書所収

圖 版



遺跡遠景 (北側より)



遺跡遠景 (南側より)



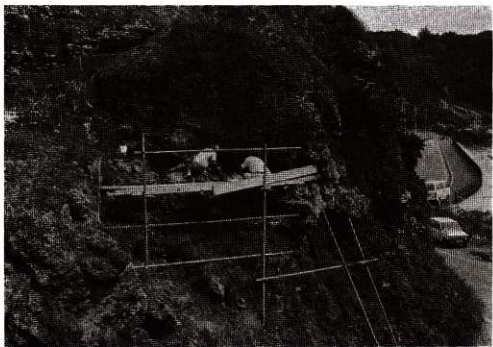
1号墓及び3号墓調査風景



2号墓人骨調査風景



1号基調查風景



1号基調查風景



1号墓人骨出土状況（南西側より）



1号墓人骨出土状況（南東側より）



2号基调查風景



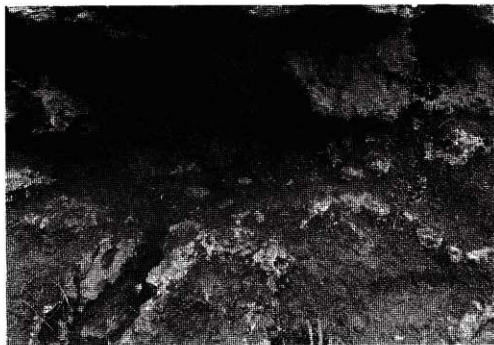
2号基调查風景 (人骨)



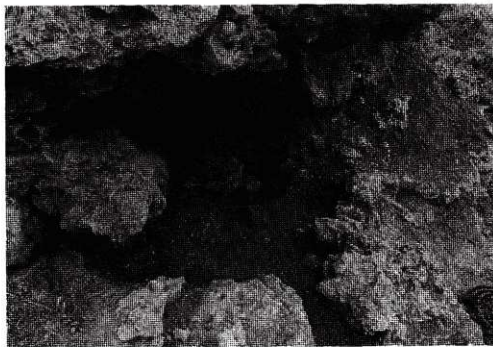
2号墓人骨出土状況（北側より）



2号墓人骨出土状況



2号墓人骨出土状況（西側より）



2号墓完掘状況（北側より）



3号墓人骨出土状況 (南西側より)



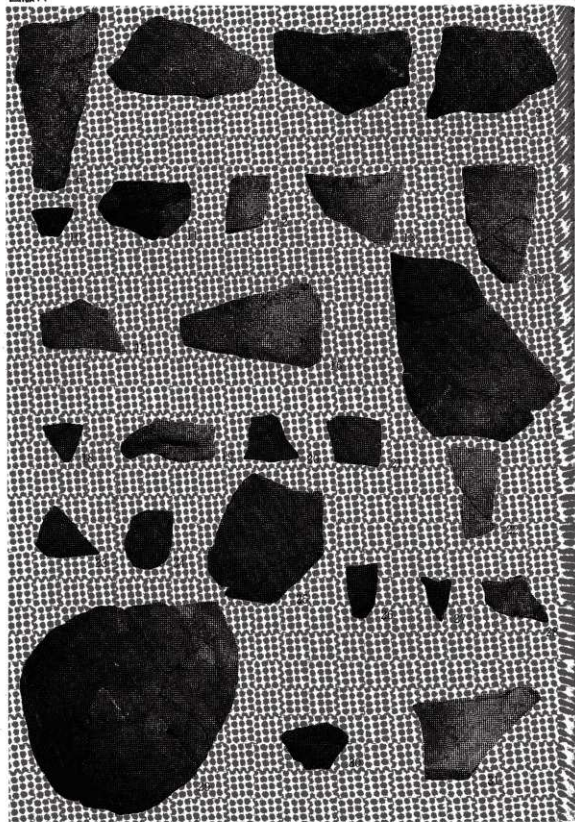
3号墓近景 (南西側より)

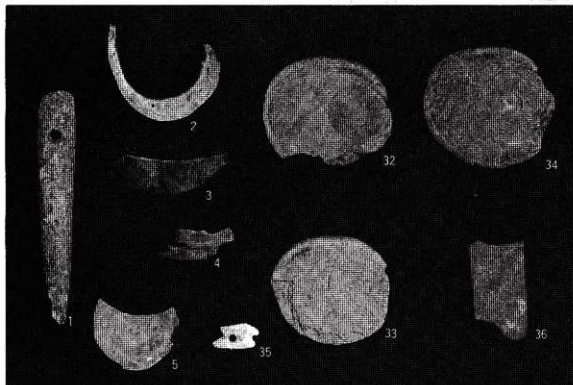


喜念クバンシャ遺跡発掘風景

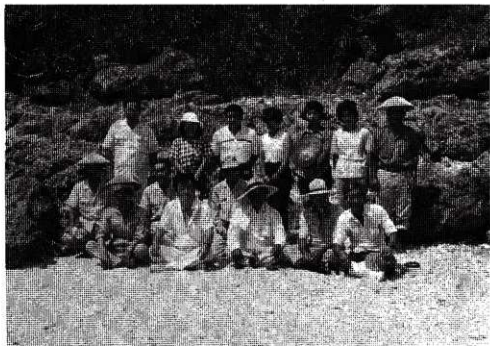


喜念クバンシャ遺跡土層断面





出土遺物Ⅱ



鹿児島県伊仙町(徳之島)喜念クバンシャ岩陰墓出土の人骨

小片丘彦・佐熊正史・峰 和治・山本美代子
(鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座)

はじめに

昭和62年(1987年)に実施された鹿児島県大島郡伊仙町(徳之島)喜念下ムデナウに所在する「喜念原始墓」の確認調査に伴って、3ヵ所の岩陰から焼骨を含む複数の人骨が出土した。喜念原始墓は、昭和10年(1935年)に京都大学の三宅宗悦によって調査された遺跡で、土器片や貝製品とともに南西諸島初の抜歯人骨が出土したことが報告されているが(三宅, 1943)、現在は破壊され、存在していない。今回人骨が検出された岩陰は、地名をとって新たに「喜念クバンシャ岩陰墓」と名付けられた。その位置は、三宅が調査を行った喜念原始墓と近接しており、両者の関係が注目される。人骨はいずれも散在した状態で出土し、骨格も部分的にしか残っていないが、隆起珊瑚礁を基底とした遺跡であるため、骨質自体の保存は比較的良好である。人骨の計測はMartin & Saller (1957)に従った。

ここに人骨調査の機会を与えられた伊仙町教育委員会並びに鹿児島県教育委員会文化課に感謝する次第である。

遺跡と出土資料

喜念クバンシャ岩陰墓は、1～3号墓に区分けされる。1号墓と2号墓は、伊仙町から徳之島町に通じる、海岸に沿った県道脇の隆起珊瑚礁の岩棚にあり、路面からの高さとはともに約3mで、県道を挟んで相対している。3号墓は2号墓の東寄り斜め下方に位置し、県道の路面とほぼ同じレベルの岩盤上にある。人骨はすべて散在した状態で出土したが、1号墓には2個体分が含まれることが確認された。2号、3号墓からも複数個体分の人骨が出土したが、小骨片が大半を占め、個体識別はほとんど不可能である。1号墓からは骨製品、2号墓からは貝輪、3号墓からは少量の土器片などが検出されている。なお、2号、3号墓の主要骨片には骨種を問わずA～Gの通し記号を付与した。

所見

1. 1号墓出土人骨(図版-1)

1号墓からは成人骨1個体(1-1号)と小児骨1個体(1-2号)が出土した。

(1) 1-1号(男性・成人)

頭蓋では左右頭頂骨、右側頭骨片、後頭骨片および下顎骨片が残っている。観察可能な矢状縫合には内・外板とも閉鎖

表1 上腕骨計測値(右, mm)

Martin's		1-1号
No.	計測項目	男性
5	中央最大径	24
6	中央最小径	18
7	骨体最小周	62
7a	中央周	68
6/5	骨体断面示数	75.0

難いが、その可能性は否定できない。遊離歯は、左上顎小白歯各1（咬耗はともにMartinの3度）、上顎左中切歯1（同2度）、下顎切歯3（同2度1、3度1、歯冠破折のため不明1）、上顎左乳側切歯1（同2度）である。齶蝕は見られない。体幹・体肢骨では椎骨片多数、肋骨片多数、右肩甲骨片4、左鎖骨片2、上腕骨片3、橈骨片5、手の骨28、大腿骨片12、脛骨片2、左腓骨1、膝蓋骨3、足の骨20および部位不明の小骨片多数が残っている。このうち頸椎1、肩甲骨片1、左右膝蓋骨には関節面の摩耗や関節辺縁の骨増殖が見られることから、これらの骨は同一個体に属するものと思われる。また、骨端が癒合していない中手骨1と中節骨（手）1がある。両者は著しく大きさが異なり、同一個体のものとは考えられないため、2号墓には未成人2個体が含まれていることになる。その他の骨片の個体識別は不可能である。女性のもと思われる右大腿骨2例（大腿骨C、同D）が計測可能で、その計測値を表2に示す。大腿骨Cは骨体上部がやや扁平である（上骨体断面示数76.9）。以上の焼けていない骨片には、少なくとも成人3個体、未成人2個体が含まれていると思われるが、正確な個体数は不明である。

焼骨は総重量480gが残っているにすぎないが、少なくとも成人4～5個体が含まれていると考えられる。焼骨の色調は、焦茶色ないし黒色のものから灰白色を呈するものまでさまざまである。骨表面はすべて滑沢で、深い亀裂や歪みが見られないことから、焼成温度は200～500℃程度の比較的低温であったと推定される。なお、色調の全く異なる左右頭頂骨が矢状縫合で接合できたことから、この頭頂部は矢状縫合で左右頭頂骨が分離した後、別個に火を受けたものと思われる（図版一3）。焼骨片は、頭蓋では後頭骨片4、側頭骨片9、左右頭頂骨1、頭頂骨片6、右上顎骨片1（上顎骨E）、左上顎骨片1、頬骨片3、下顎骨片3（下顎骨Fと小骨片2）および遊離歯2である。遊離歯の内訳は下顎右中切歯と左右不明上顎第3大臼歯で、咬耗はいずれもMartinの3度である。上顎骨Eの歯列は○●/●○○●○であり、病的所見は認められない。この上顎骨では側切歯の歯槽が閉鎖し、中切歯の歯槽が1～2mmほど遠心方向へ移動している（図版一5）。従って、右の側切歯が生前に脱落していたものと推定される。これが風習抜歯によるものかどうか不明であるが、その可能性は十分にある。下顎骨Fの咬筋粗面は粗雑であり、顎舌骨筋線の発達もよい。歯列は / / ○●●●●●●●である。体幹・体肢骨では肋骨片4、椎骨片2、右肩甲骨片1、上腕骨片5、橈骨片2、手の骨2、寛骨片2、大腿骨片6、脛骨片6、右腓骨1、足の骨8および部位不明の小骨片多数が残存している。

3. 3号墓出土人骨

3号墓からは複数個体のものと思われる少量の骨片（焼骨3を含む）が出土した。上腕骨骨体片2、右尺骨片1、右腸骨片1、大腿骨片17、脛骨片4、左腓骨片1、足の骨2および部位不明骨片18、また焼骨として頭蓋骨片1、大腿骨片2が残っている。出土骨片の個体識別は不可能である。成人男性のもと思われる右大腿骨1例（大腿骨G）が計測可能で（表2）、粗線がよく発達している。

考察

昭和10年に発掘調査された喜念原始墓からは、岩陰の堆土中に無秩序に含まれていた人骨と、いわゆる南島式土器の破片や多くの貝製品が発見されている(三宅, 1943)。国分(1972)は、三宅の記載と現地調査を踏まえ、喜念原始墓は、宇宙上層式土器を中心とした時期に、この遺跡の南西に位置する喜念貝塚地区に居住した人びとが、1次葬後の人骨を、岩陰を利用して2次的に納めた崖葬地であろうと推測している。今回、喜念クバンシヤ岩陰墓から出土した人骨は、すべて散在した状態で発見され、全身骨格がそろったものは皆無であり、解剖学的に正常な位置関係を保った骨も見いだされなかった。この点では喜念原始墓の出土状況と似ているようである。しかし、1号墓では小児骨の骨端が残り、2号墓では指骨など小さな骨が残っていることから、他の場所で1次葬が行われた後、2次葬として岩陰に納められたとするよりも、むしろ、この場所で1次葬が行われたと考えるのがより合理的と思われる。埋葬されたのか、崖葬に付されたのか、また1次葬の後、2次的操作を受けたのかは判断し難いが、1号、2号墓ともに残存する骨量が少なすぎることから、後代に攪乱を受けたものと考えられる。集骨された状態の骨は存在しなかった。3号墓から検出された人骨は、量そのものがわずかであるにもかかわらず、複数個体が含まれているうえ、広範囲に散在していたことから、上部の岩棚にあった人骨が落ち込んだ可能性が考えられる。

2号、3号墓から出土した焼骨には複数個体が含まれているが、量的にはかなり少ない。焼成温度は比較的低温(200~500°C)であったと推定される。また左右頭頂骨例のように、いったん骨化した後に焼成されたものがある。しかし、骨の焼けた原因が意図的な加熱によるものか、あるいはこの岩陰が休息や仮宿に用いられた際、焚火などによって火力が及んだものか、さらに別の理由によるものなのか、不明である。

出土人骨の残存状態が悪いため、形質全般について明らかにすることはできないが、概して大腿骨の粗線がよく発達していることが特徴的である。風習抜歯については、上下顎のそろった資料がないため確定はできないが、下顎骨Bと上顎骨Eの2例にその可能性が認められた。南西諸島から出土した人骨は総体的に数が少なく、本遺跡の人骨は葬制を考える上でも興味深い。現在のところ所属年代が必ずしも明確とはなっていないことから、今後時間をかけて多方面から検討していく必要があると考えている。

参考文献

金田義夫, 1957: 日本人の永久歯における歯根完成時期の研究。歯科月報, 30: 165-172。

国分直一, 1972: 南島先史時代の研究。慶友社, 東京, pp. 353-360。

Martin, R. & K. Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie. Bd. I. Gustav Fischer, Stuttgart.

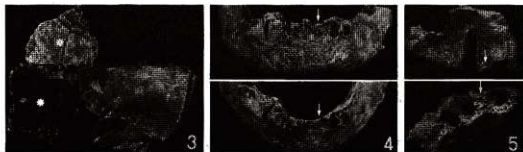
三宅宗悦, 1943: 大隅国徳之島喜念原始墓出土貝製品及び出土人骨の抜歯に就て。考古学雑誌, 33: 461-470。



1. 1号墓出土人骨



2. 2号墓出土人骨



3. 接合できた焼成程度の異なる左右頭頂骨片 (2号墓, ●印). 4. 下顎左中切歯の抜歯疑い (下顎骨B, 矢印), 上: 前面, 下: 上面. 5. 上顎右側切歯の抜歯疑い (上顎骨E, 矢印), 上: 前面, 下: 口蓋面.

あ と が き

喜念原始墓は、南島先史文化の解明にその手がかりを興えた遺物とされ、その重要性にかんがみ、特に「喜念原始墓」と呼ぶこととしたと記録にある。著名な遺物であるにもかかわらず、その場所さえもあきらかでないまま、道路工事を中止しての発掘調査となった。

実のところ、伊仙町誌編さんの折、筆者において今回の調査地点を推定して場所を示していたものの、いざ調査が始まるに至って、一種のあせりを禁じ得なかった。さいわいにして、隣接する岩場の一帯から関連する遺物や遺構の出土を見るに至り、一応調査の目的が達せられました。特に原始葬制とのかかわりを示す石棺や人骨の出土は、今回の調査の意義を著しく高める結果となりました。

おわりに、この調査を直接担当され、本報告書のまとめに御骨折りいただいた県の文化課の先生方の御労苦に深謝し、多くの関係者に道路工事を中止してのごめいわくと御協力を深謝申し上げます。

伊仙町文化財保護審議委員長

義 憲 和

発掘作業員

伊藤光房、牧島世造、嶺山純二、前田吾伸、政岡江美子、富ヤス子、清 武明、
泉田泰良、坂元 宏、泉田勝秀、元田富子、前 幸子

整理作業員

後堂悦子、川畑恵子、永野香代子

伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書7)

喜 念 原 始 墓

喜念クバンシャ遺跡

喜念クバンシャ岩陰墓

1988年3月

発 行 大島郡伊仙町教育委員会
鹿兒島県大島郡伊仙町伊仙1840番地
印 刷 吉 川 印 刷
大島郡徳之島町亀津7533番地